

豊かな文脈与える

「インターネット術語集」(矢野直明著)

携帯電話やインターネットの急速な普及に、「全然ついていけない!」と感じる人がいる。

他方で、毎日楽しくネットサーフィンしつつ、「コレって、どういう意味があるの?」と考えあぐねて、急に立往生する人もいる。

何を隠そう。大学のなかだつて、同僚どうし専門用語が通じないことが多い。

文系対理系、大型電算機世代対iモード世代など、各人の文化背景が、微妙にズレているためだ。

その点、「サイバースペースを生きるために」という実践的課題をサブタイトルに掲げたこの本は、きわめてバランスがいい。

ジャーナリストの視点から世相を切り取った、「読むキーワード事典」として秀逸なできになっている。

新書判でありながら、過去に起きた「事件」「犯罪」「流行」現象の分析から、激動するインターネット最前線の息吹まで、過不足なく伝えるコンパクトな一冊だ。

たとえば、「プロバイダー」の項では、電報や伝統的な出版文化と比較することで、より鮮明に本

質を浮き彫りにする。

「匿名(アノニマス)」の項では、「土佐日記」「ガリバー旅行記」といった匿名文学の伝統を指摘すると同時に、「青酸カリ事件」を引き合いに出して、是々非々を論じていく。

「スパム」は、「豚肉の缶詰」から転じて「迷惑な一方的メール」の意味となった。「クッキー」は、「おいしくもあれば、苦くもある」。すなわち、個人情報への便利な自動登録にもなれば、危険な流出にもなる。

なるほど! 俗語にも目配りがきいている。

「幸福=しあわせ」という具合に、ことばを言い換え、置き換えるだけのマニュアル本が目立つ中、無味乾燥なカタカナ用語に、豊かな文脈を与えてくれる。

前から後から、パラパラめくりつつ、拾い読みしているうち、しらずしらず物知りになった気がする。

なんだ! この本じたい、インターネットみたいじゃないか。(藤本憲一・武庫川女子大助教授)

(岩波新書・660円)=2000年6月1日②配信

大人のナンセンス童話

「恋する潜水艦」(ビエール・マッコラン著、大野多加志など訳)

二十一世紀を目前に控え、これからは一九二〇年代に隆盛を迎えたモダニズムが再評価されるのではないかと個人的に思っている。

そのモダニズムの時代にフランスで人気を博した作家ビエール・マッコランの中編集「恋する潜水艦」が訳出された。収録作品は三編。わが国独自の編さんによるもので、いずれも本邦初訳である。三編に共通する素材は「海賊」、そしていずれも一種の冒険小説のスタイルがとられている。

だが、冒険小説といっても、波乱万丈の物語と軽快な語り口で、単純な勧善懲悪を語る英米産のエンターテインメント系のそれとは、だいぶ趣を異にする。たとえば、スティーブンスンの「宝島」の伝統に連なる「海賊の唄」。

この話は、騎士道ロマンスを読みすぎたために現実感覚を喪失して自分を騎士と思い込むようになったドン・キホーテよろしく、海賊の物語に惑でできるあまり、性悪な青年が偽造した海賊の宝の地図にだまされる富豪の初老の悲喜劇である。そこで語られるのは、痛快無比なストーリーより、

現実から逃れて冒険にあこがれるアウトサイダーたちの希望と失意と後悔、そして人生の皮肉である。

「金星号航海記」も同様に、一貫したストーリーよりも個々の海賊の血なまぐさい言動をエピソードの集積体として提出することで、世界に対する不安や恐怖、絶望が表現されている。

マッコランは、特異な冒険小説作家であると同時に、一般のユーモリストでもあった。その本領が発揮されている作品が表題作の「恋する潜水艦」である。

ヒトラーを想起させる超人カール大佐を主人公にした航海記スタイルのこの作品は、有機体と機械が合体した未来派的な奇妙きてれつな小道具・大道具が読みどころのひとつ。とりわけ、自意識を持つ潜水艦という設定がおもしろい。全体としては、大人のためのナンセンス童話といったところで、多数の挿絵がまた、この奇想天外な話に、より深い味わいを加味している。(風間賢二・評論家)

(国書刊行会・2800円)=2000年6月1日③配信